

安乗人形芝居の歴史

『安乗の人形芝居』は安乗神社の祭礼に奉納する神賑の人形芝居として受け継がれてきた民族伝承芸能で、昭和五十五年に国の重要無形民俗文化財に指定された。人形芝居の発祥については、言い伝えとして、文禄元年（一五九二年）豊臣秀吉が海外出兵した際、志摩の国の領主九鬼嘉隆が軍船団の将として鳥羽港を出て安乗の沖にさしかかると、急に逆風が吹いて軍船が進まなくなりこの時、嘉隆は安乗神社に航海安全と武運長久を祈願しました。その時に上陸した所が舟付け、神社にお参りするのに身を清めた所が大垢離です。現在でも地名が残っています。

安乗神社に祈願した嘉隆は順風が吹き出し無事目的地に着き、合戦で武功を立て、その帰路安乗神社にお礼参りをしました。その時に村民が手踊や種々の芸能で大歓迎をしました。この時に九鬼嘉隆から許された芸能が幾多の変遷を経て現在の安乗人形芝居として伝承されています。



大正末期の不況と昭和初期の戦争により一時中断していましたが、昭和二十六年に村民の願望であった復興を達成しました。今後共、保存会員一同益々精進致しますので、皆々様の温かいご支援ご指導の程切にお願い申し上げます。

◆九月十五日

鎌倉三代記

三浦之助母別れの段

三浦之助は戦場で負傷し、病気の母親の顔みたさに戻ると、敵方の大将北条時政の娘時姫が看病にきていました。時姫の介抱で正気を取り戻した三浦之助は一目母親に会おうとしますが、戦場より三浦之助が戻ったと知った母親は「我が子には忠義を大切にしよう教えた。そんな未練がましい事をする子ではない」と顔を合わせず口説きます。母親の思いに気が付いた三浦之助は再び戦場へ行こうとします。

死を覚悟した三浦之助に、時姫は自らの愛の深さを語り、母の最期を看取ってほしいと引き留めようとします。母親と時姫の間で迷いに迷う三浦之助でありました。

傾城阿波の鳴門

巡礼歌の段

十郎兵衛が借金で留守の家に、飛脚が一通の手紙を届けにきます。手紙は「既に追手が迫っている」との仲間からのものでした。お弓が夫の身を案じ、「神仏助け給え」と手を合わせているところへ、かわいい巡礼の御詠歌が流れてきます。あまりにも可憐な少女なので、国を尋ねると阿波の徳島であり、父母に会うため巡礼をしているのだと言う。身の上話を聞いてみると、この子こそわが娘であると知ります。

預けておいた祖父母が死んだので、両親の行方を尋ねて巡礼の旅に出ているのだという。お弓は愛しさのあまり、その場で母と名乗って抱きしめたい思いにかられますが、共に暮らすことの出来ない今の境遇を考え思い悩みます。何かといたわりの言葉をかけ、涙とともに心を鬼にして帰すお弓ですが、だんだん遠ざかるおつるの御詠歌の声を聞いているうちに、耐えかねて思わず後を追って駆け出していきます。

十郎兵衛住家の段

入れ違いに十郎兵衛が我子と知らずにおつるを伴って帰り、小判を持っていると聞いて、「貸してくれ」と頼みますが、おつるが騒ぐので誤って殺してしまいます。戻ったお弓はこれを知って泣き悲しみますが、捕り子が押し寄せるので、おつるの死骸とともに家に火をかけ、夫婦は逃げのびるのです。

